

第2回 橿原市総合教育会議 議事録

日時：令和6年2月22日（木）

13時30分～15時00分

場所：かしはら万葉ホール4階 研修室2

<出席者>

○構成員：亀田市長、吉田教育長、伊藤委員（教育長職務代理者）、三橋委員（教育委員）、竹内委員（教育委員）

○市：山風呂理事

【企画戦略部】戸田企画戦略部長、若森企画戦略部副部長、清水企画政策課長、西川企画政策課主幹、谷本企画政策課課長補佐兼企画係長、松井企画政策課主査、奥野企画政策課主査

【教育委員会】栗原教育委員会事務局長、清水教育委員会事務局副局長併こども・健康スポーツ部副部長、河野教育委員会事務局副局長、辻本教育委員会事務局副局長、片岡教育総務課長、鶴田学校教育課長、吉田人権・地域教育課長、奥村図書館長、西浦中央公民館主幹（※）、布上こども発達支援課長、葛本学校教育課指導主事、井上教育総務課課長補佐、山本教育総務課統括調整員

※出席者に誤りがありましたので訂正しました（令和6年9月26日）

【こども・健康スポーツ部】北野こども・健康スポーツ部長、熊本こども・健康スポーツ部副部長、門長こども政策課長、岩本こども未来課長、今井スポーツ推進課長

<傍聴人数> 4名

1. 開会

2. 市長挨拶

まずは教育委員の皆様方におかれましては、大変ご多忙の中で令和5年度第2回橿原市総合教育会議にご出席を賜り、心から感謝申し上げます。

まず冒頭に、これまで教育委員として就任いただいております松山豊樹委員が先月1月15日にお亡くなりになりました。松山委員には、この教育総合教育会議でも専門的な知見から様々なご意見を賜っていただきました。大変残念ではありますが、この場をお借りいたしまして松山委員のご冥福を心からお祈り申し上げます。

そしてまた、中平委員の任期満了に伴い、昨年10月25日に教育委員に就任をされました竹内委員に今回からご参加をいただいております。竹内委員には改めて、よろしくお願いを申し上げます。

今回の案件は、まず一つ目に全国・奈良県における橿原市の教育と銘打っており、かなり大きな視野での案件になりますが、改めて橿原市の教育について、教育委員の皆様方と意見

交換をさせていただきたいと思っております。

二つ目は、幼稚園の再編及びこども園の認定こども園化、小・中学校の再編についてということになっております。一つ目につきましては、全国学力・学習状況調査の結果を参考にさせていただきながら、先ほど申し上げたように教育委員の皆様方と榎原市の教育について、いろんな意見交換ができたありがたいと思っております。二つ目につきましては、現在の再編状況や今後の方向性について、ご説明をさせていただきたい。報告という形であることを、ご理解いただきたいと思います。

限られた時間ではございますけれども、有意義な会議になりますことを、よろしくお願い申し上げます。冒頭のご挨拶に代えさせていただきたいと思っております。ご出席いただいている関係者の皆様方にも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 教育長挨拶

皆さま、こんにちは。本日もご多用中、ありがとうございます。

今は人事の季節で、それぞれが気持ちを一新して、また頑張ってもらうために、我々も努力しているところであります。私は就任時、今も求めていることですが、各学校へ「体温と体力を持ってくれ。しっかり子どもや親とも付き合ってくれ」と言い続けております。それには授業の充実、教員の更なる資質の向上が必要であり、このあたりを重点的に指導しております。

また来年度4月からは働き方改革として、いろんな具体的な取り組みも始める予定であり、これも保護者には連絡を行っております。ただ、学校や教員の中で「楽できるわ」とか「手を抜けるわ」とあってはならんことです。問い合わせもありますので、次の校長会でも具体例を出しながら、しっかりと確認・徹底をして参りたいと考えております。

先般、白樫小学校の統合準備委員会が終わりまして、新しい学校をスタートするのですが、保護者の思いは『とにかく子どもが笑顔で行ってほしい』ということであり、非常に切実な思いを感じております。そのためにも教員の果たす役割は非常に大きいので、市内22校、来年から21校になりますが、徹底してまいりたいと思っております。

抽象的な話になりましたが、本日は具体的なご意見もいただきながら、今後、榎原市の教育がより充実するよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

4. 出席委員紹介

事務局より紹介

5. 議長の指名

榎原市総合教育会議設置要綱第4条第1項により、市長を議長に指名

【市長】会議の進行に対し、ご協力をお願いいたします。本日の会議は、会議録を作成させていただき、榎原市総合教育会議設置要綱第7条により公開いたします。

6. 議題① 「全国・奈良県における橿原市の教育」について

それでは議題に入ります。まずは、議題①の「全国・奈良県における橿原市の教育」について学校教育課より説明をお願いします。

【葛本学校指導主事】資料1について説明

【市長】ありがとうございました。ただいま担当課より資料に基づいて説明がありました。調査の結果報告ではありましたが、全体的に中位という評価が、資料の分析の結果としてありました。ただ、各学校間の格差や、学習に関する理解度をより深めていくために課題があるという説明も最後にありました。

私自身もこの学力・学習状況調査が全てだとは思っていません。これだけを見て橿原市の子どもたちの評価をするのは、あまり良くないことだと思っています。ただ、一つのパロメーターとして、参考にする必要性の高いものであると思っています。

この結果も参考にしながら、橿原市の教育の向かうべき方向性、あるいは具体的な政策など、いろいろな意見交換ができれば、と冒頭申し上げました。教育委員の皆様方から意見をいただき、質問があれば担当課から説明をしていただきたいと思います。

ただ全部一度に行うと論点が絞りきれないので、学力と体力と規範意識に分けて、委員の皆さんが感じておられることをご意見としていただきたいと思います。

まずは学力に焦点を置いて、議論を行います。先ほども申し上げたように、『書く力』も結果的には全国平均と同等レベルで中位という評価ですけれども、4ページを見ますと橿原市内でも最高点と最低点の格差がかなりあるというデータも出ております。平均すると中位ですが、学力の底上げをしっかりとしていけないといけない部分もあります。

学習意欲が高い子どもたちは、どんどん自分で勉強をしていくけれども、勉強がなかなかできない、あるいは勉強になかなか向かえない子どもたちもいる実態があります。そういった子どもたちの学力を少しでも上げることは、将来生きていく中で、非常に大切なことだと思います。できることが一つでも多いと、社会に出た時の選択肢は増えてくるので、格差をできるだけ埋めていく。特に、なかなか学習に向かい合えない環境にある子どもたちの学習をどうしていくのか。この学力に対してご意見があればいただきたい。いかがでしょうか？はい、伊藤委員をお願いします。

【伊藤委員】よろしくお願いします。まず学力に行く前に伺いたい。かなり長いこと学力・学習状況調査はやられているが、私の理解している範囲では、継続的に全国あるいは奈良県の平均を少し下回って中位が続いている状況かと思います。

そのなかで提示のあった学校間の格差については、変化がないのか、学校ごとに毎年違う結果になっているのかどうか。あとは、中学校三年生は多分小学校6年生の時のデータがあると思う。今の中3が、小6だった時のデータから、どんな変化を見せているのかも比較すべきだと思うのですが、その辺はやられているのかどうか。

【市長】はい、ありがとうございます。まず2点ご質問いただきました。格差があるという

ことですが、年によって良いところと悪いところのばらつきがあるのか、それとも固定化されているのか。もう一つは、今の中3の子が小6の時のデータを比較したものがあるのかどうか。

【葛本学校指導主事】まず1点目の質問ですが、固定化をしていることはありません。若干変動はありますし、学校によっては、昨年度は非常に良かったけれど、今年度は非常に難しい状況もある。やはり年度によって変わるところはあるが、ある意味で変わらないのは、そういう変動がありながらも、大きな差が生まれているというのが一つ。

【市長】毎年変わっているという認識でいいか。よくできた学校とあんまりできなかった学校は入れ替わりがあるということでもいいですか。

【葛本学校指導主事】必ずしも全てが固定化されてはいないですね。

【市長】でもいいところがずっといいという傾向も。

【葛本学校指導主事】ある一定あるにはある。

【伊藤委員】逆に変化があるということは、何らかの要因があると思うので、やり方もどんどん出てくる、と今の返事で感じました。

【市長】全てが固定化している、変動しているとはなかなか答えにくいということですよ。いい成績がずっと続いているところも当然あるだろうし、年によってぐっと落ちることもあるだろうし。成績がずっと伸びないこともあれば、ぐんと上がることもあるだろうし。通して見ると固定化はされていないけれども、何年か続いて良い成績を残しているところも当然あるから、そういう意味では良いところがずっと良い状況で残っている認識でも取れるのかなと思う。これなかなか難しいところですかね。毎年ごちゃまぜになっているという認識ではないのかなと思いました。ある程度はできるところ、なかなか厳しいところがあり、その中で出たり入ったりするという認識を私は持ちましたけれども。2つ目っていただけますか。

【葛本学校指導主事】2点目の質問ですが、現在のところ、例えば小学校の学力・学習状況調査を受けた児童の点数が、3年後の中学卒業時にどうなっているかという追跡、傾向を調査したことはございません。

【市長】今後してみようという予定はどうですか。これ中3の方が3年前にやった学力・学習状況調査の結果は、すぐ出てくるんですよ。毎年発表しているから、3年前の小学校6年生の結果を見れば分かるわけで、その数字を拾い上げれば比較はできるんでしょうが、冒頭に申し上げたとおり、これが全てじゃない。ただ、参考にはなると思いますよ。なので、今、伊藤委員がおっしゃられたようなことは、ちょっと作業するのは大変かもしれませんけれども、1回データを見てみるのは面白いことかなと思いますけどね。

【鶴田学校教育課長】失礼します。今、伊藤委員がご提案いただいた企画ですが、個人レベルとなると800～900名で人数がすごく多くなる。けれども、学校間・学校単位での比較は比較的容易にできます。例えば、真菅と今井の子達の平均正答率を出して、大成中学校の同じ集団の平均正答率と比較することはできますので、今後検証していきたいと思います。

【市長】ぜひお願いしたいと思います。最初、比較するための基礎データを入れるのに時間はかかるかもしれませんが、デジタル戦略課にアドバイスしてもらって、その年のデータを入れると3年前と比較できる計算式は、簡単に入れられるような気がする。立ち上げるのはしんどいかもしれませんが、1回作っておくとこれから比較は簡単にできると思いますので、ぜひ検討していただきたいと思います。

他に大丈夫ですか。では三橋委員お願いします。

【三橋委員】先ほど伊藤委員がおっしゃった学校間格差の話ですが、このグラフ見ますと、かなりの差があります。実はこのことは樫原市に限ったことではない。去年の8月2日の朝日新聞デジタルの社説だったと思うが、今回のこの学力・学習状況調査で学校間の格差がはっきりした、浮き彫りになった、そういう報道がありましたので、おそらくこれは全国的な傾向だろうと思います。

実際、このグラフを見ますとかなりの差があります。特に中学校より小学校の差が大きいと思うが、これだけ差がある原因は一つや二つではなくて、恐らくいろんな原因が複合的に組み合わさった結果だと推測します。

だからこれを一朝一夕に埋めるのは、なかなか至難の技だと思う。少なくとも学校だけでは、この差はなかなか埋まるものではない気もしております。というのは、例えば『学校でちゃんと勉強をしよう』と思えば、その前提として当然身につけていなければならないことがある。例えば、小学校に入ったら『ちゃんと座って先生や友達の話聞く』とかは、小学校に入ったからすぐにできることではない。それこそ就学前から、身に着けなければならないことです。

あるいは小さい子によく言われる、家での本の読み聞かせとか。そういう文化的な経験があるかないかでは、当然学力にも影響があると思う。こういう数字には表れにくい『見えない学力』を、小さい時から身につけていくことが大事で、そのためには当然学校だけでは駄目です。家庭あるいは地域の皆さん、放課後児童クラブ、地域のスポーツクラブ、そういうところで小さい頃から身につけさせていく必要があるかと思います。

それから、先ほど本の読み聞かせと言いましたが、読み聞かせのためには本がいるわけで、本を買うだけの一定の経済力が必要なので、場合によっては行政の支援も必要になってくる。みんなが寄って総合的に支援することが、この差を埋めるために大事だと思います。だから、今回の学力・学習状況調査の結果を、教育委員会だけではなく、市役所関係の各部署で今日のように共有していただくのは、大変大事なことだと思います。

【市長】はい、ありがとうございます。確かにおっしゃる通りかと思います。そして全てが結果をもとに判断するものではない。学力、例えば勉強になかなか自信がなくても、スポーツに秀でた子どももいる。文化的な活動に秀でた子どもたちもいるわけで、勉強だけで評価をしてあげるのは、ちょっと乱暴なことかなと思います。

ただ先ほど申し上げたように、やっぱり少しでもできることを増やしてあげるのは大事で、学校現場だけの問題ではないという三橋委員のご意見は、その通りだと思っています。

これに対して、例えば就学前に、こども政策課、こども未来課で気をつけてやっていることはありますか。

【岩本こども未来課長】就学前教育では、就学の終わりまでに身につけたい、育ってほしい姿が10項目に分かれてあります。例えば健康な心と体であるとか、自立心であるとか。それは就学前の5歳児だけが身に着けるものではなく、0歳児ではここまで育てよう、その土台を0～1歳から育てようというところです。就学前でも、今一番大事だと言われているのが、特に小さい0～2歳の子どもで、この歳の子どもは特定の人との安心した繋がりが一番大事だと言われているので、1人1人に向き合って、安定して過ごせるように取り組んでいるところです。

0～3歳は当然保育所・こども園に通っている子どもだけではなく、家庭で育てている子どもも多い。家庭教育の支援も就学前の教育には必要になっているので、子育て支援に取り組んでおります。

【市長】0～2歳も含めた就学前教育に該当する子どもたちには、家庭での様々なその支援が必要なので、その保護者に対してもいろいろと支援、あるいはアドバイスをやっているという認識でよかったですでしょうか。はい、ありがとうございます。

他に何かご意見があればどうでしょうか？伊藤委員お願いします。

【伊藤委員】どうしても答えにくい質問が多いかと思う。皆さん、市長も教育長もおっしゃるように、数字の結果が全てではないと私も思っております。では何が重要なのか。

例えば6ページにある『学習者を主体とした授業改善に関する項目』の一部を抜粋されているわけですが、この質問項目の小学校でいえば32～34、中学校は36～38、自分の頭で考えて工夫して相手に伝えていくという、今の授業の重要項目だと思うところを見ると、小学校から中学校に行く過程で、直接比較はできないですが、大きく悪化、ポイントが下がっています。

会社を経営していても、いつも感じるけども、小学校や中学校レベルの算数とか国語ができない大人はそんなにいない。勉強苦手な社員も多いが、そういう社員でも学ぶ姿勢とか、自分の頭でどうしたらいいのかと考える社員は、10年20年経つと大きく差がついて行っています。

単純にこの結果とリンクするものではないですが、なぜ小学校から中学校に行くと、ここまでポイントを下げってしまうのか。何か理由が予想されるものがあるのでしょうか？

【市長】学校教育課、お願いします。

【葛本学校指導主事】ひとつは、学習指導要領が変わり、子どもたちの学び方が変わっています。この途中ではあるのですが、新学習指導要領では個別最適な学びと協働的な学びの一体化、いわゆる学びの姿、学び方を子どもたちが学んでいく、自分の学びのスタイルを作っていくところに重点が置かれている。そこで必要となってくるのが、デジタル端末の利活用。これも非常に大きなエッセンスである一方で、中学校現場では、ICTを活用した学習状況に関する項目は、小学校に比べてまだ十二分に進んでいない状況であります。

これらが何故なのか。一つ考えられるのは、中学校での学びの仕方について、まだ大きく先生方のマインドがチェンジできていないところにある。その理由を探っていくと、やはり受験の形が、それほど大きくは変わっていない。

今、全国学力・学習状況調査で求められている問題は、新指導要領で求められる力を測定する問題となっていますが、やはり実際の高校受験ではある一定の点数を取っていかなければならない。そういった中で、中学校の先生方も非常に苦慮されており、新しい学びのスタイルを生徒とともにどのように作っていくのか、一つ大きな課題になっていると感じています。ちょっとお答えになったかどうか。

【市長】はいどうでしょうか？

【伊藤委員】ありがとうございます。先生がおっしゃっていた最後の課題は、学習者を主体とした授業改善に、ICT をいかに組み込んでやるか、ということかなと思いました。ICT を活用されている先生が多分、増えてきているかと思う。新聞やメディアの情報しかほとんどないですが、うまく活用されている例は凄くたくさん出てきていると思う。で、市内を見ると、そういう活用例はあんまり我々のところには入ってきていない。授業の質の向上にも繋がると思うので、それを向上させることが非常に可及的速やかに求められていると思う。次年度の取り組みで、計画されているものがあれば教えてください。

【葛本学校指導主事】まず今年度、学校教育として取り組んだところです。ICT 端末を利活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体化をするにあたって、小学校では学校に希望をとって、ICT を利活用した授業改善に関する研修を行ってきました。中学校では、例えば今日は国語の先生方、明日は数学の先生方を対象とした、教科ごとの ICT を利活用した授業の研修を計画し行ったのですが、やはり参加率がなかなか伸びなかった実態があります。オンデマンドでも見られるようにしたので、当日参加されなくても研修された方もいるかも分かりませんが、ここを一つ大きな課題として残っています。

もう一方で、真菅・今井小学校の先生方の自主的な研修会というものを、市内の全校に呼びかけ、自主的な学びの場が広がりつつあります。いわゆる子どもたちの学びの仕方を考えようというもので、特段、真菅小学校では ICT を利活用した授業について、そういった動きも出ているところです。

次年度に向けては、実は昨年度もトライをしてみた『リーディング DX スクール』という文部科学省の事業があります。少なくとも小学校 1 校と同一校区内の中学校 1 校が、専門家の支援を年間 10 回程度受けながら、学校全体として個別最適な学びと協働的な学びの一体化を目指した検証をしていくものです。事業へのチャレンジを呼びかけましたが、ちょっとこちらの方は（現場に）届かなかったところです。今年度も今週に入って国から再度通知がありましたので、声掛けを積極的にはしています。ただやはり、これは全校一体、全教職員が一丸となった取り組みなので、なかなか校長先生方にとって、今ある学校の実態・課題のなかで、新しい学びに進めていこうと賛同いただけるところが出てくるかどうかは未知数です。が、担当としては粘り強く当たっているところです。これは本当に叶うか否かまだ分

かりません。

あともう一つ検討しているのは、先ほど申し上げた、自主的な学びの会です。これが2つの小学校を軸として出来ているのであれば、学校教育課としても「子どもたちの学びの仕方をともに考えませんか」と有志へ呼びかける。授業改善を主とした学びの会を作ってみてはどうかということが、検討段階です。

【市長】各学校によっていろいろと温度差があるということですが、教育委員会中心に、できるだけ粘り強く、趣旨や目指す方向性をまとめていくことが大事かと思います。学力のところ、竹内委員は何かございますか。

【竹内委員】国語、算数・数学、興味関心とか授業理解等の質問事項ですが、非常に漠然としています。もう少し具体的に、国語であれば語彙力なのか読解なのか、算数にしても計算、図形なのか、領域別の調査があればより深く検討していく材料になるかと思うのですが。

【鶴田学校教育課長】領域別の資料を用意していますので、配布させていただいてよろしいですか。

【葛本学校指導主事】説明させていただきます。ご参加の皆様は、各教科の領域別の平均正答率について、橿原市のホームページの方から見てください。

小学校の国語は奈良県平均と比べますと、ほぼどの項目も同様ですが、全国と比べて特段課題と考えているのは『書くこと』と『情報の扱い方に関する事項』です。数学につきましては、非常に橿原市の子どもたちは頑張っていると感じるのですが、データの活用が少し弱いと感じています。

続きまして中学校ですが、国語はやはりこちらも『情報の扱い方に関する事項』および『書くこと』に加え、特段『読むこと』に課題があります。数学につきましては、データの活用です。英語については『書くこと』が非常によくできているのですが、『聞くこと（リスニング）』に課題があるかと思います。

これらの課題に基づき、例年、橿原市の学校教育の指導方針を、教育委員会並びに校長会・教頭会の代表の先生方と作っていくわけですが、特段、国語の『書くこと』『情報の取り扱い』には課題があるので、指導方針の中でも加味しているところです。

小学校の思考力・判断力・表現力のところでは、情報を整理し、自分の考えのまとめ方・書き表し方を工夫して、考えをお互いに伝え合う、というあたり。指導方針を定めるにあたって、この辺りを十分加味し、次年度の取り組みに繋げていきたいところです。

【市長】はい、ありがとうございます。これは、最初に説明して頂いたデータのほかに、こういう質問があるということですか。

【葛本学校指導主事】今日最初に提示したデータはいわゆる平均正答率です。全ての問題に対しての正答の割合です。各問題には細かく『話すこと』『聞くこと』『書くこと』『読むこと』があります。各問題を領域別に整理した正答率も、学力・学習状況調査では国の方からいただけます。

【市長】そういうことですね。ありがとうございます。これも参考にさせていただけたらと思

います。はい、三橋委員。

【三橋委員】今、細かい領域別も示していただいたのですが、今日の説明の冒頭では、全体的な傾向として全国・県平均と比べて中位にあるというお話だったと思う。そういう、全国や県と比べた順位は大変気になるけれど、今示していただいたように、どの部分がよく出来てどの部分が弱い、どこに課題があるかという視点で、この資料を見るのも大事なことだと思います。

前回の会議でもお話させていただいたと思うのですが、例えば『櫃原市は漢字が弱い』というデータがあった時に「全国も弱いから良いか」とはならないと思う。弱いところは、よそが高くても低くても、しっかりやらなければならない。そういうふうにこのデータは見ないといけない。ついでとと比べる感じになってしまうけど、そこはやっぱりこのデータを見る上で大変大事だと思います。

それからもう一つずっと気になっているのは、今回のこの調査自体が本当に子どもたちの今の学力をちゃんと反映しているのかどうかということです。というのは、特に小学校の場合は、普段学校で受けているテストとずいぶん形式が違うと思う。普段は、1枚の紙があって、問題の下に答えを書く。こういうのが多いと思うけど、この調査の場合は問題用紙と回答用紙が全く別になっている。形式がずいぶん違うので、小学生にとっては特に戸惑いがあるのではないかな。そういう意味で、事前の練習も必要なんじゃないかな。決して練習して良い点数を取らせるためではなく、調査で正しいデータを取る、正しい学力を反映するという意味で、そういうことも必要ではないかなと思います。

【市長】はい、ありがとうございます。確かに、おっしゃる通りかなと思います。できるところを伸ばしてあげて、できないところを補充していく。あくまでも櫃原市の子どもたちの状況を判断するためにデータを活用することが大事かなと思います。

やっぱり慣れる、慣れないはあるでしょうね。緊張して書けなかった、普通であれば書けたみたいなのもあると思いますし、もし可能であれば模擬テストをよろしく願います。

学力だけで時間がきてしまいますので、そろそろ終わりにしますが、教育長、学力のところで何かありますか。

【吉田教育長】手短に何点か。三橋委員や市長からありましたが、格差の点ですね。私も何校か経験していますが、やっぱりそれぞれに特徴があります。ある学校では宿題プリントを渡したら9割5分やってくる、次の学校へ行ったら半分もしないとかね。さっきおっしゃった家庭の状況は実際あると思います。だから点数が悪くても良いという意味ではない。

それから小6と中3。これから調べますけれども、小学校から中学校行くときに、例えば八木中は9%が私学へ進んでいく。それはほとんど上位の子なので、そういうところで実際伸びていない部分もあるかもわかりません。ただ、中学校の授業ももっと工夫していただかないといけないと、いつも課長と言っております。

練習も必要とありましたが、例えば葛城市では、担任がしっかりと説明してロッカーの上

に昨年度の分を1冊置いとくらしいです。子どもらがペラペラと見て『こんなテストなんやな』という取り組みもされている。

樫原市も点数を上げるためではないけど、何か取り組みはしないといけないという話をしています。課長と葛本が、校長先生方に「過年度分を一度解いてみるとか、今年の分の採点を自分達でして自分の授業に活かしてください」と粘り強く伝え、22校中半分もなかったのが、今もう半分超えるぐらい取り組んでくれている。それはこれからも努力していきたいと思います。以上です。

【市長】ありがとうございました。1点だけ、私もお願いをしておきます。得意な子もいれば苦手な子もいるので、当然格差が出てくるけれども、せっかくのICT教育の推進になります。1人1台のパソコンがあって個別最適化ということなら、できる子にはどんどん宿題や課題を与えていく、苦手な子に合った学習をさせられるようになってくるということですよ。だからICT教育の推進とは、格差の解消でもあると思います。

中学校ではなかなかそういった授業は取り組めていない部分もあると、先ほどありましたけど、できるだけそこも上げていく必要がある。全国一斉にスタートしたテストなので、これはやっぱり取り組むべきである。

学校の先生は大変ですが、ICTを活用した個別最適な学習の取り組みがもっと進んでいくと、意欲を持って学習に取り組んでもらえるようになるのかなと思います。取り組む意欲によっては、市町村格差が出てくると思いますので、ぜひ推進していただきたい。

そしたら体力について、何かご意見があればいただきたいと思います。これも結局、中位になっておりますけれども。体を動かすことでトップアスリートを養成しようということでは全然なく、年代に応じたある程度の体を作っていくのは大事なことで、体力が続いていくのに必要なことでもあるということだと思います。特に何かありますでしょうか。

先ほど三橋委員から、学力のところで話が出ました。地域のスポーツクラブに行っているとか、どんどん活用している子どもたちも当然いるでしょう。部活動の地域移行の話も出ております。いろんな年代に応じて、様々な体力向上の取り組みがあるのでしょうか。よろしいですか。では最後、規範意識に行きたいと思います。生活についても、何かご意見があればいただきたい。

【三橋委員】資料1の17ページの括弧9いわゆるいじめの問題です。『いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか』という質問に対して、小学校も中学校も『どんな理由があってもいけないと思う』と、全国や県平均同じぐらいの子どもたちが答えているように思うが、これもさっきの学力の話と一緒に、全国や県と同じぐらいだからこれで良いにはならないと思う。特にいじめの問題については、少数ながらも否定的な回答の子がいます。

学校の先生も気をつけていただいていると思いますけど、『どんな場合でも人をいじめることはあかん』と徹底的に指導しないといけない。ので、これもさっきと同じように学校だけではなく、家庭はじめ、放課後の色んな活動の場で、これについて考えないといけないこ

とかなと思います。

【市長】ありがとうございます。まさに、おっしゃる通りだと思います。

私もこのデータを見たときに『いじめはどんな理由があってもいけないことだと思います』に当てはまらないのが、一定数いるのが非常に気になりました。これはもう、三橋委員がおっしゃられた通り、学校だけではなく、地域や家庭、社会全体でしっかりと教えていくことです。子どもだけではなく大人も、生きていく上で一番大事なことからと思います。どんな年代であっても許されることではないという認識を如何に持ち続けられかが、大事なことだと思います。

伊藤委員長、よろしくお願いします。

【伊藤委員】今の三橋先生のお話にも少し関連しますが、スマホを持ち始める学年、年齢が毎年のように下がってきていると思います。以前だったら高校生や中学生からが一般的だったと思うけども、多分もう小学校の1・2年生から、3・4年生からだとかかなりの割合で持っているのが現実です。私もその年代の子どもがいるけども、やっぱりその中でいじめまで行かないけど LINE のグループが外されるとか、いたずらに近い嫌がらせとか仲間外れが発生する。それはもう致し方ないというか、当然のように発生します。

中学生に対してのスマホ教育は、学校でも結構出来ていると思うけども、小学校はまだプリント1枚ぐらいでしかやられてないのかなと思っています。もう親が持たせるのが当たり前という認識を、学校は持たないといけない。それに対しての教育、親に対しての教育もできたらやらないといけない。竹内さんの専門かもしれませんが、必要だなと最近、親の目から見て感じています。

【市長】ありがとうございます。スマホに関して、子どもたちに対して行っていること、学校教育で説明できることはありますか。

【鶴田学校教育課長】伊藤委員がおっしゃったように、スマホの持ち始めの低年齢化が進んでいます。そこで、小学校ではスマホに限らず学習用端末タブレットも容易にインターネットと繋がることができ、チャットできたりしますので、各校に配置している ICT 支援員によるネットモラルの授業を、年1回以上実施しています。そこで各発達段階に応じたネットの危険性等も認識するように指導しています。

もう一つは道徳の授業でして、道徳は教科化される前は『こうするのはいけない』『いじめはいけない』と教員が指導していましたが、今はそうではなく『なぜいけないか』をいろいろ考え、議論する道徳に変わってきています。子どもたちが議論する中で「いけないよね」と実感するような学習形態になっています。インターネット、スマホの危険性に触れた教材も扱われていますので、そこでスマホのマナーや危険性について指導しているところです。

【市長】これはやっぱり粘り強くやっていただかないといけないと思います。何回やってもいいことでしょう。何回もできない時間的な制限もあるけれども、子どもたちにとって切っても切れないもの、誰しも持てるものですので、使い方は十分に教えてあげることが大事だと思います。竹内委員に、伊藤さんから専門分野だというご指摘がありましたけども、何か

ご意見があればお願いします。

【竹内委員】私は大学で、こういったモラルの授業をしています、人それぞれに認識がないと授業したとしても浸透するのは難しいです。本当に日々いろんなネット上の問題があるので、具体的に、子どもたちが自分ごとに考えるような取り組みをしていただければ良いのではないかな、とは思っています。ICT 教材に至るもので勉強するのも一つですけど、やはり『実際にこういうふうになるよ』というのを明確に、小学生であれば小学生レベルで授業をしていただく。ただ、子どもたちだけではなく、やはり保護者の方も意外に安易に考えていることがあるので、両方のモラルを引き上げるような対策をとっていただきたいと思います。

【市長】ありがとうございます。これは子どもだけではなく保護者の方々、全体的に考えないといけないと思いますけれども、例えば学校教育課の中で、保護者の方に対して何か啓発とかあわせてありますか。

【鶴田学校教育課長】コロナ禍以前は、授業参観後に講演会として、竹内委員のようなスマホの専門家の方に来ていただいてご指導いただく機会を持っていたのですが、コロナによって講演会を開催できなくなって今途絶えているところです。また復活させていきたいと思っています。

【市長】ぜひお願いしたいと思います。先ほどからも出ていましたが、学校だけではなく、家庭でしっかり子どもに教えることができる親、地域で関わっている人全員で、同じ認識を持つことが大事だと思います。

規範意識はこれぐらいで大丈夫でしょうか？教育長、なにかありませんか。体力職員等々、大丈夫ですか。

三つに分けてきましたけれども、一つ目の課題につきましては、ある程度ご意見をいただいたということで、また参考にさせていただき、実行に移していくことをそれぞれの関係課においてよろしくお願いしたいと思います。

7. 議題② 幼稚園再編及びこども園認定化、小中学校の再編について

それでは2番目の案件に移りたいと思います。『幼稚園の再編およびこども園認定化、小・中学校の再編について』、こども・健康スポーツ部と教育委員会から報告があります。清水副部長、お願いします。

【清水教育委員会事務局副局長併こども・健康スポーツ部副部長】資料2に基づき説明。

【市長】ありがとうございました。今説明いただいた幼稚園の再編、あるいは小中学校の再編について、報告ではありますが折角の機会ですので、質問などがあればお受けさせていただきたいと思います。

【三橋委員】幼稚園について資料2-1の2ページの一番下、閉園に反対の保護者の会に対して丁寧な説明を行っている、ということでした。当然、反対はあると思いますが、主な理由はどのようなものでしょうか。それから、それに対してどういう説明や対策をしていただ

いているのでしょうか？

【清水教育委員会事務局副局長併こども・健康スポーツ部副部長】耳成西幼稚園の閉園への反対ですが、真菅北幼稚園に公私連携保育園を建てることに反対されているわけではなく、耳成西幼稚園の閉園自体に反対と言われているわけでもありません。といいますのも、まだ園児数が14人以下と、過小規模園ほど少なくなっているわけではない。また保護者の方は、榎原市がこれまで行ってきた幼稚園教育がそのまま継承されないのではないかと、一番大きな懸念として言われています。公私連携、いわゆる私立の幼稚園ができるので、私立幼稚園の教育に特化したものになってしまい、今の耳成西幼稚園で支援のいる子どもに、すごく手厚く丁寧に保育教育をしているのが継承されないのではないかと断言されています。

それに対しては、あくまでも公私連携で運営は私立の園ですが、中身は今までやってきた榎原市の幼稚園教育を継承していただき、また何かあったときには、必ず市も教育的な面でしっかり関与します、という説明を丁寧にさせていただいているところです。

【三橋委員】ありがとうございます。二つ目の小・中学校の再配置の問題も同じですけども、自分のところの幼稚園、小学校・中学校がなくなるのは、いろんな意味で大変不安なことだと思います。なかなか住民としては受け入れがたいことだと思いますので、先ほど副局長がおっしゃっていたとおり、反対されている方の不安や懸念を今後とも十分に聞いていただいて、少しでも安心して進んでいけるように、丁寧な説明・対応をお願いしたいと思います。

【市長】はい、ご意見ありがとうございます。今のご意見も踏まえて、引き続き丁寧なご対応よろしくお願い申し上げます。他にございますか？

それでは私から一言。先ほども三橋委員からもありましたように、その地域から施設がなくなるのは大変大きな出来事であると思いますが、総合的に判断して様々な方針を立て、それに向けて進んでいる状況であることも事実です。繰り返しになりますが、関係する皆様方への丁寧な説明と、これによって子どもたちが今よりも良い就学前教育や、小・中学校の教育を受けられる環境をしっかりと作っていき、「いろいろとあったけれども、再編して良かった」と言ってもらえるような方向性を目指していくということでよろしくお願い申し上げます。また、その都度、教育委員の皆様方にもご意見をいただいて参考にさせていただきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは特にご質問がないようでしたら、これで議題を終わらせていただいて、私の進行も終わらせていただいて、事務局にお返ししたいと思います。

8. 閉会

ありがとうございました。以上で全ての議題が終了しましたので、令和5年度第2回榎原市総合教育会議を終了いたします。来年度、令和6年度につきましては、現在日程を検討しております。決定次第メールなどで、ご連絡差し上げますので、調整のほどよろしくお願い申し上げます。委員の皆様ありがとうございました。